<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>項目</td>
<td>無名少女の偉人伝： ジョン・ダン『周年追悼詩』</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>齊藤 美和</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>齊藤美和：欧米言語文化研究（奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会）第3号 30号</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10935/4319">http://hdl.handle.net/10935/4319</a></td>
</tr>
<tr>
<td>出版社</td>
<td>Nara Women's University Digital Information Repository</td>
</tr>
</tbody>
</table>

**テーブルの説明**

この表は、特定の文献の詳細情報を示しています。各項目には、タイトル、作者、引用、URL、出版社などの情報が含まれています。
無名少女の偉人伝
—ジョン・ダン『周年追悼詩』—

齊藤美和

I. 哀悼と伝記

他のどのような機会よりも、死別は人を伝記へと向かわせる。故人の一生を振り返りつつ、葬儀では遺族による弔辞が述べられ、公の場では追悼演説が打たれ、教会では追悼説教が行われる。Donald A. Stauffer は English Biography Before 1700（1930）のなかで、ルネサンス期イングランドにおける伝記ジャンルの形成について論じ、この時代、個人の一生涯を綴り、後世に残したいという欲求が新たに高まると、様々な形で伝記的な書き物が残され、十七世紀にかけて追悼演教集や葬送詩集などが相次いで出版されるに至ったと指摘する。今日でいうところの伝記（Biography：OED では Dryden 1683 年が初出）が一つの文学ジャンルとして確立していなかった時代、故人の足跡を記録する役割は、主として墓碑銘（epitaph）や葬送詩（funeral elegy）が担っていた。墓碑銘とは最も簡潔な伝記であり、たとえそれが故人の名と生没年のみ刻んだ墓標であったとしても、一の人間がこの世に生きた証を残すという伝記の根源的な目的を果たしていることに変わりはない。epitaph のギリシャ語源 ‘epi-taphos’（upon a tomb）が示すように、墓碑銘は墓とは物理的に互いに切っても切れぬ関係にある。墓石に刻まれた文字は、埃を被り、風雨に晒されながらも、故人の生きた証となって後世に残る。墓は文字を刻む場としては空間的に非常に制約がある。最小限の文字数で最大限に故人の人生について語ること——ときにそれが墓碑銘に取り組む者の究極の課題となる。一方、葬送詩は墓石よりも葬儀との関わりが深く、詩の綴られた紙が棺に留められること古くからの慣習もあった。葬送詩は一般に三つの要素から構成される。すなわち、〈悲嘆〉（lamentation）、

〈賛美〉（praise）、〈慰め〉（consolation）である。葬送詩は、愛する者の死に直面した遺族の悲しみを代弁し、故人の生前の功績を称え、死者が今は天で神と共にあることを詠って悲嘆に暮れる遺族を慰める。この三要素はいずれも伝記的記述を含みうるが、特に〈賛美〉は故人の生前の美徳や功績について語ることになるため、伝記的側面が顕著に現れることになる。A. L. Bennett は、同時代の修辞学教本が葬送詩のスタイルに多大な影響を及ぼしたと論じ、そのことは主に伝記に基づく賛美の様式、元徳の重視、慰めの常套の主題にみられると指摘し、伝記的な賛美的具体例を示すにあたっては、人生を六段階に分け、誕生から順に記すべきことを述べた Thomas Wilson の The Arte of Rhetorique (1553) を引用している。人の死をきっかけに生み出されるこうした墓碑銘や葬送詩は、故人の出生地や受けた教育、地位や業績、さらには晩年の生活や死に様までを辿ることのできる、まさに包括的な伝記であった。

しかしながら、本稿で扱うジョン・ダン（John Donne）の『周年追悼詩』（Anniversaries [1612]）は、伝記としてみた場合、まったく不完全な書き物である。読者は、弔いの対象たるエリザベス・ドルアリー（Elizabeth Drury）について、未婚の少女であったということを除けば、何ら具体的な情報を与えられることはない。故人への法外で形而上的な称賛を特徴とするこの追悼詩を、「女性のイデア」（“the Idea of a Woman”）についての詩であるとしたダンの弁明はありとも有名であるが、詩人はそうならざるを得ない理由があった。ダンが「一度も会ったことがない」4 という少女は、1610 年 12 月に十五歳足らずの若さでこの世を去り、生前両親に愛しかったが、とりたてて人々の記憶に残るような行為をしたわけでも、何かに秀でていたというわけではない。世間はその名をほとんど知られぬまま、サフォーク州ホーステッドの屋敷で暮らし、誕生日を目的にしてこの世を去った。つまり、賛美すべき個別の事項を欠いていたばかりではなく、夭折により、詩人が賛美を展開するための人生後半

のステージが失われていた。短命にして無名の少女——ダンがドルアリー卿から葬送詩の創作を引き受けたとき、有力なパトロンと目していた卿のために、この平凡な娘の死をいかに是非に哀悼するかという至極困難な課題に直面することになったのである。では、ダンはどのようにこの少女の人生を記し、追悼したのであろうか。

『周年追悼詩』は、「第一周年追悼詩」、「葬送詩」、「第二周年追悼詩」の三作品から成る。1612年にこれらがまとめて出版される際に、「葬送詩」（“A Funerall Elegie”）は二つの周年追悼詩の間に置かれたが、創作年は、エリザベスの葬儀にあたります「葬送詩」が書かれ、次いでこの詩と共に1611年に「世界の解剖」（“An Anatomy of the World”）というタイトルで「第一周年追悼詩」が出版され、さらに一年後の1612年に「魂の再臨」（“Of the Progres of the Soule”）という副題付きで「第二周年追悼詩」がこの世に出た。従って、二つの周年追悼詩で展開される主要なテーマは、「葬送詩」にすでにその着想をみることができるのである。

「葬送詩」の冒頭で詩人が語るのは、エリザベスの棺外れの「偉大さ」である。それを測る尺度として、詩人はまず墓をもち出す。「このような客人を墓に託そうとしても、無駄な骨折り、／大理石の棺に彼女を納めようなど、無理なこと」と（“Tis lost, to trust a Tombe with such a ghost, / Or to confine her in a Marble chest.” [FE:II.1-2]）ドルアリー夫妻は愛娘のためにホーステッド教会に立派な墓を建てており、ダンはこの墓の建立を念頭において引用の詩行をしたためのかもしれないと。「無駄骨」であるとは、娘の死を悼む両親の想いを逆撫でするようであっても、かけがえの無い子どもを失った二人のやるせない心情を詩人は代弁しているのである。さらに詩人は、いくら貴重な石を使おうとも、天然の宝石で造られているエリザベスの美しい身体を納めるにふさわしい墓を建立することは不可能であると断じる。「あり、大理石や黒玉、紫紅斑岩にと

れほどの価値があるか／その両眼の貴重な石、彼女を形づくる真珠やルビーに比ければ。」("Alas, what's Marble, Jeat, or Porphiry, / Priz’d with the Chrysolite of eyther eye, / Or with those Pearles, and Rubies which shee was?" [FE:II.3-5])

‘blazon’の技法を使って女性の顔の造りを宝石に納めるのは、恋愛詩の常套であるが、エリザベスの緑の瞳を貴重な石であるとし、その面を真珠やルビー（赤い目とそこから覗く白い歯のことであろう）であったと讃えるとき、詩人が読者の記憶にとどめようとしているのは、恋愛詩の場合とは異なり、少女の生前の容姿の美しさであるというよりはむしろ、その類まれなる「高価さ」である。豪華な墓も、東西インドの生む富も、彼女に比べれば、ガラスほどの価値しかない（FE:1.6）。故人の偉大さに見合うだけの墓がないと嘆くことで、生前の地位や業績、功績を讃えるのはよくあることだが、顔の造りを宝石に讃えることによって大理石の墓と物質的価値を競わせるというのは、哀悼の対象が女性であるからこそその意匠であろう。さらに、エリザベスの身体の一インチは、スペインのフェリベ二世が二十年以上もの歳月をかけて完成させた壮麗なエスコリアルの十倍もあるのだ（FE:1.8）とダンがいうとき、墓の物質的価値だけではなく、その規模が問題にされている。ダンは少女の遺骸を法外に引き伸ばし、どのような壮大な墓所にも納まりきらない巨人に仕立て上げている。

エリザベスの「大きさ／偉大さ」は、墓のみならず世界との照応によって語られる。マクロコズムである世界とミクロコズムである人体を対照させ、「（世界的）腕たる君主、頭脳たる顧問官／舌たる弁護士、心臓、いやそれ以上たる聖職者／脇袋たる金持ち、背中たる貧乏人／手たる役人、足たる商人」（“Princes for armes, and Counsailors for braines, / Lawyers for tongues, Divines for hearts, and more, / The Rich for stomachs, and for backs the Pore; / The Officers for hands, Marchants for feet” [FE:II.22-25]）と、世界を一つの身体として示した後、こうした世界の諸器官を調査していたのはエリザベスであったとし、死が次に標的にしようとする、彼女に比肩する大きな獲物があるとすれば、それは世界そのものをいて他になかろうと詩人は告げる。「なぜなら、死はさらに勝利に向かって突き進もうとするが／彼女の次に殺めるものが見つからない／彼女に匹敵する大きな標的といえば世界くらいのもの」（“For since death will proceed to triumph still, / He can finde nothing, after her, to kill, / Except the world it selfe, so
彼女の悲しい一生を知らずに
運命の書を読む者は
彼女がこの世でいかに美しく貞節で、謙虚にして気高く
十五にもならぬ身空で将来を瞭望され、既に偉業を成したかを知り
成したことからこれから成すことを推し量り
次を読もうと頁を繰れば、そこにあるはずの続きはなく
運命が間違いを犯したのか
あるいはこの書の頁が破り取られたのかと思うであろう。

He which not knowing her sad History,
Should come to reade the booke of destiny,
How faire and chast, humble and high shee’ad beene,
Much promis’d, much perform’d, at not fiftenee,
And measuring future things by things before,
Should turne the leafe to reade, and raed no more,
Would thinke that eyther destiny mistooke,
Or that some leafes were torne out of the booke. (FE:II.83-90)

偉大な少女の一生についての記録（“history”）を読もうとして「運命の書」を
紐解く者は、これからという段に差しかかって記述が突如、途絶えていることに
当惑することになる。「運命の書」はいうならば、人の一生が予め記された
神の手になる伝記であり、エリザベスの生涯は、途中からページが「破り取られ
」ている。天折した者を弔う場合、生きていれば実現するはずであったこと
を数え挙げて死を惜しむのは、葬送詩の常套である。そこにあるはずであった
伝記の続きを、我々は故人の生前の生き様から心のうちに綴ることになる。エリザベスの伝記の「空白部分」は、これから先、人々によって積まれる善行によって埋められていくのだとして、ダンは未来の人々の功績を彼女に帰すことによって、伝記の続きを完成させようとする。「後世の者たちは運命の書を補い／書の空白部分を埋めたことで運命と彼女に感謝されるであろう。」（“They shall make up that booke, and shall have thankes / Of fate and her, for filling up their blanks.” [FE:II.101-102]）後世の善行はエリザベスの「遺産」（“Legacies” [FE: I.103]）であり、未来の人々が彼女を傲いのまま演じるさまこそが、彼女の失われた円熟期の人生を世に知らしめることになる。このように、ダンはエリザベスの後半の人生を補い、未完の伝記を完成させるために、これから綴されることになる未来の偉人伝をすべて、エリザベスの伝記に取り込むのである。つまり、彼女は世界を内包するミクロコズムであったばかりではなく、いまだ書かれていない世界の歴史を内包する存在でもある。エリザベスの一生は、この世界の伝記そのものなのである。

II．破り取られた伝記

（1）〈処女期〉で終わる完全なる人生 －聖女としてのエリザベス－

後半が「破り取られた」エリザベスの人生ではあるが、伝記作家にとっては語るべき前半が残されている。先ほど触れたように、Wilson などの修辞家は、葬送詩で綴られる故人の人生を六段階に分けた。しかし、弔いの対象が女性である場合には、また異なる区分も考えられるであろう。女の一生涯は、結婚を軸に考えられるのが一般的であったからだ。Jeanne Shami は、女性のためになされた当時の追悼説教を概観し、「女性の生涯は一般的に、処女期、婚姻期、寡婦期の三期に分けられたため、説教師は場合に応じて重点の置き所を巡配した」（“Since women’s lives were typically divided into three stages—maidenhood, marriage, and widowhood—preachers adjusted their emphases accordingly.”）と述べているが、これは葬送詩についてもいえることであろう。この三期のうち、特に結婚前の女性は、〈処女期〉にこの世を去った清らかな娘として、その「敬虔さ」と「純潔」とが強調される。「若い娘への追悼説教は、家事の能力よりも、祈りや瞑想、教会への参列によって培われた敬虔さや、あるいは純潔を保ったこ
無名少女の偉人伝

とが強調された。」（“Funeral sermons for young women stressed godliness cultivated through prayer, meditation, and church attendance over domestic skills or the preservation of chastity.”）

6 ダンの『周年追悼詩』もまた、エリザベスをこの二つの美德が表裏一体にだから難く結びついた存在として讃えている。

「葬送詩」において、エリザベスの「敬虔さ」と「純潔」は、彼女の肉体を非物質的に描くことで強調される。“clear”, “pure”, “thin”（FE:1.59）という語が彼女の肉体を形容するために選ばれ、魂の器でありながら魂以上に質量をもたない様子が示される。「その肉体は彼女の心を包む透明な衣にすぎず／魂から吐き出された呼気にすぎない。」（“Twas but a through-light scarfe, her minde t’enroule, / Or exhalation breath’d out from her soule.” [FE:II.61-62]）ここでの“enroule”は、第一義的には“包む”の意であり、彼女の肉体はその中身を覆い隠さず、薄く透けた霊妙な纖維のように映脅な心を露わにしていったことを表現するが、同時にこの語には「記載する」「登録する」の意があることから、エリザベスの透明な肉体は、彼女の穢れのない生き様を記す、いわば生前の墓標のようなものであるといえる。さきに触れたエリザベスの墓であるが、脣をついて横たわるエリザベスの雪花石膏の影像の上には、ラテン語で刻まれた墓碑銘が掲げられており、これはダンによるものだと考えられている。彼女は、通りすがりの「旅人」に語りかけるという墓碑銘の伝統に則り、「旅人よ、いずこへ向かうか汝は知るまい」（“Quo pergas, viator, non habes.”）と碑文を始める。この墓に眠っているのは「善」（“probitas”）そのものであると告げる。ここで讃えられる少女の徳は、天使に勝るとも劣らない生前の「美と清純」（“pulchritudine, et innocentia”）であり、生来「無性」（“sine sexu”）である天使に対し、自ら女という性を放棄し、純潔の穢れなき肉体のまま、神のもとへ召された彼女は、天使を超えた存在であるとダンの讃美は続く。これは「第二周年追悼詩」の一節「彼女は和平を結んだが／それは美と貞節が互いに口づけを交わす無比の和平であった」（“shee made peace, for no peace is like this, / that beauty and chastity together kisse;” [II.363-364]）と同テーマの変奏であり、「貞節な美人はいない」という、恋愛詩でも繰り返される（いうまでもなく、

7 墓碑銘からの引用は、Epithalamions, Anniversaries and Epicedes, 76.
ダンもお気に入りの）通説を裏切る稀有な女性であるとエリザベスを称える。結婚前に逝った少女の純潔が、この墓碑銘の主たるテーマであることは間違いなく、女になる前に逝ること、言い換えるならば、〈婚期〉と〈寡婦期〉が「破り取られた」人生であったことこそが、エリザベスを偉大にしているのであり、彼女が「善」そのものであるのも、このためなのである。

Kim M. Phillips は、論考 “Maidenhood as the Perfect Age of Woman’s Life”（1999）のなかで、中世において人生最良のステージは男性にとっては円熟した〈壮年期〉であるが、女性の場合は〈処女期〉であると考えられていたと結論づける。Phillips は〈処女期〉を、肉体的には十分成熟していてながら、婚姻前の純潔を保たなければならないという、一種緊張状態にある時期と捉えており、少女は穏やか存在である一方、そうであるがゆえに欲望の対象となる魅力を常に意識させる存在であったと指摘する。エリザベスが結婚の可能性が欠かしながら、未婚のままこの世を去ったことは、「葬送詩」の以下行で仄めかされている。「勇気のない男たちはただ崇め／それだけの価値のある男たちは皆、彼女を我が物にしたいたいと願った。」（“One, whom all men who durst no more, admir’d; / And whom, who ere had worth enough, derir’d;” [FE:ll.63-64]）つづいて、「それはちょうど建てられた神殿をみて互いに／祀られるのは自分であると聖人たちが競い合うようであった」（“As when a Temple’s built, Saints emulate / To which of them, it shall be consecrate.” [FE:ll.65-66]）と、求婚者たちを聖人に、エリザベスを神殿に譬えることによって、“desire”という語の性的意味合いを薄め、男たちの欲望を搔き立てる「女」の存在でありながら、肉欲の対象であるという印象を避けようとするが（Elizabeth M. A. Hodgson はエリザベスのこのような描かれ方を指して、「unwomanly womanhood」と呼んでいる）、それでも、内に納める器としての “Temple” は、そのイメージを紛れ得ない比喩であろう。少女は文学者たちを悩ませる新星にもなぞらえられ、新発見された星々が正体を突き止めぬうちに天から姿を消してしまうように、エリザベス

---
9 Elizabeth M. A. Hodgson, Gender and the Sacred Self in John Donne (Newark: University of Delaware Press), 186
無名少女の偉人伝

は詮索好きの世界を尻目に、「誰のものにもならぬ」まま（“she can be no bodies else” [FE:1.72]）、この世から消えてしまった。彼女は実用的な灯りではなく、香油のランプのようなもので、照らし続けるためではなく、この世に続く間の華を添えるために「望まれた」（“desir’d”）ので、あっという間に「燃え尽き」（“expiry’d”）てしまった（FE:ll.73-74）。64行目では、“admir’d”という対照的な語と韻を踏むことによってその性的含意を強めていた“desir’d”であるが、ここでは“expiry’d”と押韻することで、エリザベスにとって欲望の対象になることは死に直結することが、暗に示されている。結婚を避けることによって、彼女は「処女の白き完全性」（“Virgin white integrity” [FE:1.75]）を保ち続けた。なぜなら、結婚によって純潔には色が付いてしまうからである。「結婚は、それを汚すことはないが染めてしまう。／女に付き物の脆さを逃れるため／彼女は女になる前に逝った。」（“For marriage, though it doe not staine, doth dye. / To scape th’infirmities which waite upone / Woman, shee went away, before sh’was one.” [ll.76-78]）ここでいう「女に付き物の脆さ」には、原罪を犯したイヴの娘たちに罰として科された出産の苦しみも含まれるであろう。純潔を失うことは女になることであり、女とは出産の苦難を抱えた脆き存在である。結婚前に逝くことによって、エリザベスは女の宿命を避け、永遠に〈処女期〉に留まることができたである。実際、詩人は、エリザベスが自らの意志で乙女のまま逝ったのだと語る。「運命はただ手を引いて／理性の働く年頃まで彼女を導き／あとはその運命を彼女自身に委ねたが、与えられた自由で／彼女がしたことは、ただ、死ぬことであった。」（“Fate did but usher her / To yeares of Reasons use, and then infer / Her destiny to her selfe; which liberty / She tooke but for thus much, thus much to die.” [ll.91-94]）ここで彼女の死は、まるでこの世の喧騒を避けるべく、自ら死を選んだ自殺とも取られかねない表現で語られている。Barbara K. Lewalski はこれを「成人した女とこの世の脆さを免れるための、故意による英雄的選択」（“her conscious heroic choice to escape the infirmities of adult womanhood and of the world”）と解しており、ダンがエリザベスの死を殉教者のごとき英雄的最期として描いていると捉えている。10 このように、エリザベス

スは天折により結果として純潔を保ったのでなく、それを保たれたために自ら
死期を早めたのだというダンの賛辞によって、聖女としてのイメージをとびら
すことになる。

『周年追悼詩』には、聖女伝の伝統を取り込んで考えていると思考してよい要素が多くみられる。そもそも、「Anniversary」は、宗教的な意味においては、聖人や殉教者を讃えて慶めを行う一年の周期を指す語であった。「第一周年追悼詩」の冒頭で、ダンはエリザベスが天折したのは、彼女が「聖人たちを長く待たせてお
くのをよしとしなかった」（「loth to make the Saints attend her long” [FA:1.9]）からであるといい、それに「第二周年追悼詩」で自らの魂に向かい「上へ、上へ」（“Up, up” [SA:1.339]）と呼びかけるとき、詩人はエリザベスの魂がこれから向かう先には、父祖や縁者が、使徒たちと共に、殉教者や聖女たちが彼女を仲間に
入りさせようとその到着を待ち詫びていることを告げるのである。処女聖人は「聖霊の神殿を誰かに明け渡すくらいなら／聖霊と共に住まおうと／考えた処
女聖人たち」（“those Virgins, who thought that almost / They made joytenants with
the Holy Ghost, / If they to any should His Temple give.” [SA:II.353-355]）と表現
されており、ここで“Temple”は、先に引用した「葬送詩」65行目の“Temple”
と同様に、清い肉体を表している。聖女ルキアは、彼女を娼婦であるとののし
る異教徒たちを前に、「処女を守り、純潔に生きる者は、聖霊の神殿です」と
答えられたと思われる。二つの「周年追悼詩」で讃えられる“She”を聖ルキアであ
ると考えたのは、Richard E. Hughes であった。エリザベスが没したのは、この月（lux）の聖女の祝日にあたる十二月十三日であったとみられ、この偶然が
Hughes の主張に説得力をもたせている。彼は「第二周年追悼詩」からの次の
詩行を、聖ルキアが自らの肉体を聖霊の神殿に譬えた一節と比較してみせる。

11 “In ecclesiastical use, the word ‘anniversary’ was used for the days of annual commemoration of
saints or martyrs, and other ‘Holy days … Anniversaries’ (Sermons, iv. 368).” Milgate, Epitaphamons and Anniversaries, 127. OED: “(Roman Catholic Church) Sometimes used for the
annele or commemorative service performed daily for a year after the death of a person.”

12 ヤコブス・ド・ウォラギネ『黄金伝説』前田敏作、今村孝訳全4巻（平凡社、2006年）
第1巻、85頁。「葬送詩」I.16 では、彼女の身体を指して“Tabernacle”としており、意
図するところは同じであるが、天国と対比されて、彼女の魂の一時的な住まいであること
が強調される。

307-326.

—80—
無名少女の偉人伝

エリザベスはどのような誘いを受けようとも（“being solicited to any Act”）それを除け、「神が固く婚約を約束する声を常に耳にしたので／信心深くそれを信じ、ここ地上では／神の婚約者であったが、いまや天国で神の花嫁である。」（“Still heard God pleading his safe precontract; / Who by a faithfull confidence, was here / Betroth’d to God, and now is married there,” [SA:II.459-462]）これはルキアに限らずとも、聖女伝に広くみられる共通のモチーフであり、聖女たちは異教徒の権力者によって求愛され、その信仰を誓われる。彼女たちにとって、純粋を捨てることはすなわち、信仰を捨てることである。聖女たちは異教徒の妻になることを拒み、キリストの花嫁になる（すなわち、殉教する）ことを選ぶ。“solicit”という語は、エリザベスが誘惑の対象となっていたことを仄めかすが、信仰が盾となり、決して近寄ることのできない聖女さながらに、エリザベスはキリストの婚約者として生きたのだとダンは謡う。このようなカトリック的聖人崇拝を思わせる女性への賛美は、宮廷恋愛詩においても珍しくはなく、ことさらダンの宗派的スタンスを示す必要はないだろう。しかしながら、フランスで創作された「第二周年追悼詩」の結びで、この国では誤った信仰から聖人たちに祈りを捧げるが、「仮にあなたほどその名を唱えたい聖人がいるならば／私はここフランスで、カトリックに改宗するでしょう」（“Could any Saint provoke that appetite, / Thou here shouldst make mee a French convertite.” [SA:517-518]）と詩人が告白していることには、注目すべきである。ここでダンは、聖人崇拝を断じるプロテスタントとしてのスタンスを示しながらも、エリザベスの聖性には抗いきれず、聖女伝を自ら綴ることになったのだと吐露しているに等しいからである。『周年追悼詩』がエリザベスという聖女への一種の聖歌になっているという意識が、詩人には確かにあったということを、ここから窺うことができるのである。

聖女として死ぬということは、俗人の伝記なら記されるはずの、母として子を生し、育てるという〈婚姻期〉における女の（唯一にして最大の）業績を上げずに死ぬということでもある。エリザベスの「偉大さ」を損なわないので詩人がもち出すのは、聖母マリアである。「第二周年追悼詩」において、天へと向かってエリザベスの魂を瞑想することで共に上昇してきたダンの魂は、聖母マリアが天国で受けている祝福から、母たることそのものに価値はないと知る。
マリアは “Mother-maid” (1.341)、つまり純潔を保ちつつ母となった存在であるが、「天国ではマリアは母であったがためというよりは／善なる存在であったことで讃えられている」 (“Where she’s exalted more for being good, / Then for her interest, of mother- hood.” [SA:II.343-344]) のあるから、母にならなかったことでエリザベスの名誉は損なわれることはないのである。14 聖女伝は、純潔を貫く女たちを描くことで、母体としての女の価値を否定しているようであっても、たとえば安産の守護聖人である聖マルガレタなど、聖女たちに母のイメージを付与することがある。次の一「一周年追悼詩」の一節においては、エリザベスの「産み出す」力が語られ、子孫を残すという女の役割を、エリザベスが不足なく果たしているかのように表現されるが、母というよりは、彼女はむしろ創造主のようなである。

彼女の記憶の薄暮はここにとどまり
老いた世界の遺骸から解き放たれて
新しい世界を創造し、新たな生き物が
生み出される。新世界の原材料は
彼女の徳であり、その形相は我々の実践である。

The twi-light of her memory doth stay;
Which, from the carcase of the old world, free,
Creates a new world; and new creatures be
Produc’d: The matter and the stuffe of this,
Her vertue, and the forme our practise is. (FA:II.74-78)

終焉を迎えつつあるこの世に、黄昏の淡い光となって人々の記憶に残るエリザベスは、新たな世を創造し、彼女にあって生きる子孫を生み出す。彼らは遺伝子学上の子孫ではなく、彼女の徳を継ぐ者として、エリザベスの徳を血肉として発生するが、子孫がその徳を自らのものとするには、「実践」が必要である。

14 ハンティンドン伯爵夫人への書簡詩 (“Man to God’s image”) には、以下のような詩行がある。「あなたは妻や母と呼ばれるが／すべての女がそうなるわけではないので、これらは女一般の徳ではない」 (“Though you a wife’s and mother’s name retain, / ’Tis not as woman, for all are not so.” [II.29-30] )
無名少女の偉人伝

母親は子に質料を与え、父親は形相を与えるという考え方はアクィナスにみられ、母親に偏わっているのは物質的な肉の塊を生み出す受動的な力のみであり、父親の能動的な力こそが生命の誕生に積極的な作用を及ぼすとされる。\(^5\) ダンが男性的力と女性的力についてこれに沿った捉え方をしていることは、

*Biathanatos* (1647) において議論を「母性的作用」（“Motherly Office”）と呼び、それを通じて結論を導き出す理性は「至高の男性的力」（“a Soueraigne, and masculine force”）を有するとしていることからも、分かりとおりである。\(^6\) したがって、上の引用では、エリザベスは母体としての二次的な役割を果たすにとどまっていることになる。ところが興味深いことに、「第一周年追悼詩」の37行目では、エリザベスは世界に形相を与える存在であるとみなされているのである。「エリザベスの名こそがおまえを世界たらしめ、形相と枠組みを与えた。」（“Her name defin’d thee, gave thee forme and frame,” [FA:1.37]）

Robin Robins はこの箇所の注釈で、「ルカによる福音書」一章の洗礼者ヨハネの母エリザベトとエリザベスとの関連づけ、ダンはエリザベスが子を生すことがなかったために、代わりに世界に生命をもたらす役割を与えているのだと解釈している。\(^7\) しかしながら直前で、世界は君主たるエリザベスが住まうことで初めて「宮殿」（“Palace” [1.36]）となり、その名が与えられると語られていることからも、世界を産む母のイメージよりは、物質としてのみ存在していた世界に形相を与える父的力をもつ者として、エリザベスは語られているように思われる。

「第二周年追悼詩」にも、エリザベスを「形相」と表現する詩行はみられる。「エリザベスはこの世界にあったものを何一つ欠くことではなく／彼女こそが世界に生命を与えた形相であったのだから。」（“Who [Elizabeth] could not lacke, what ere this world could give, / Because shee was the forme, that made it live;” [SA:II.71-72]）

このように、エリザベスは世界に形相を与え、生命体として維持する男性的な力を発揮した乙女として讃えられている。

---


さらに「第二周年追悼詩」の冒頭で、ダンは清いまま逝ったエリザベスを「母」の名を拒んだ少女であるとするばかりではなく、「父」とみなし、ダンの詩神に子（すなわち詩）を孕ませると呼びかけている。

永遠の乙女よ、汝は母の名を
拒んだが、わが詩神を受胎させ
汝は父とされ、詩神の慎み深い野心は
この詩のような子を年ごとに生み出すことなのだから。
願わくば、こうした讃美歌が未来の才人たちに影響を与え
汝への讃美の曾孫が育ちますように。
Immortal Mayd, who though thou wouldst refuse
The name of Mother, be unto my Muse
A Father, since her chast Ambition is,
Yearely to bring forth such a child as this.
These Hymnes may worke on future wits, and so
May great Grand-children of thy praises grow. (SA:ll.33-38)

年ごとにエリザベスに周年追悼詩を捧げたいという詩人は、その願望を「慎み深い（“chast”）野心」とオクシモンで表現するが、母の名を拒んだ「永遠の乙女」、すなわち「貞潔な」（“chast”）キリストの許婚としてのエリザベスの人生と、多作の比喩としての子孫繁栄とは、これもまた自己撞着である。こうした表現は、ここでエリザベスを女であり、かつ男であると定義することの矛盾と響き合っている。

だが、エリザベスが男の性をもつ者とされていることは、彼女が未婚の娘であったことと、実は相容れないことではない。教父らは、魂を探求する精神生活を送るために、女性たちに「男になる」ようにと勧めている。ヒエロニムスは、子を産む育てる性であることが、女を男とは「肉体と魂ほど違う」存在にしているとして、女に世俗的な性を捨て、神に仕えることで男のようにになれると言っている。“そもそも、完璧であるはずのエリザベスが「脆き性」である女として生まれてきたこと自体、大いなる矛盾である。次の一節において、ダ
無名少女の偉人伝

彼女の出現を、古代人は予言していたようだ
徳を「彼女」と呼んだのだから。
徳は彼女の内でありに精錬されていたので
合金にすべく、そのように純粋な精神に
脆き性を混合したが、彼女は
イヴの毒素や穢れを
その思考と行いから追い出し、すべてを
真の信仰の錬金術で純化できた。
She, of whom th’Auncients seem’d to prophesie,
When they call’d vertues by the name of shee,
She in whom vertue was so much refin’d
That for Allay unto so pure a minde
Shee tooke the weaker Sex, she that could drive
The poysounous tincture, and the stayne of Eve,
Out of her thoughts, and deeds; and purifie
All, by a true religious Alchimy; (FA:ll.175-182)

「徳」（“virtue”）のラテン語“virtus”は女性名詞であることから、「彼女」（“shee”）がエリザベスのことを指し、古代人が彼女の出現を予言していたと
詩人は主張しているが、“virtus”の語源“vir”は「男」である。これを単なる言

18 Vern L. Bullough, “Transvestites in the Middle Ages,” American Journal of Sociology 79.6 (1974): 1383. 近年、聖女伝にみられるジェンダーに関する研究が進んでいる。聖女伝には、男装
をして修道士として暮らす娘たちが描かれる。彼女たちは髪を切り、男の衣装を身に着
けることで女の性を捨て去り、「男」として宗教生活をする。Jocelyn Wogan-Browne, “The
葉遊びと見做すことはできないのであって、"She" で指示されたエリザベスが体現する「徳」の女性性は、"virtue" の根源にある男性性によって中和されている。引用にみられる鍊金術の比喩は、エリザベスのもつ一種の自浄能力を示しており、Helen Carr も指摘するように、少女は「鍊金術の火の男性性」によって自らを精錬し、女の穢れを浄化した存在として讃えられるのである。このように、未婚のまま生を終えたエリザベスは、聖女のように純潔を守ることで男の性を帯び、女でありながら女の脆さを免れて「第三の性」を生きた娘として描かれるのである。

（2）〈婚姻期〉と〈寡婦期〉—母体としての「世界」—

『周年追悼詩』は、ひとりの少女の伝記であるばかりではなく、今や臨終の床にある世界の追悼詩でもある。これまでみてきたように、エリザベスは〈処女期〉にとどまり続けた聖女として讃えられた。一方、彼女の一生から「破り取られた」〈婚姻期〉と〈寡婦期〉は、人生における罪深くみじめなステージとして世界に託され、病み衰える世界の伝記、言い換えるならば人類の歴史が、〈処女期〉に続く二つのステージとして語られることになるのである。

「葬送詩」の冒頭で、ダンは「装われた謙虚」（affected modesty）のトポスを用い、自分のような詩人にはとてもエリザベスは弔いされないと落胆の色を見せる。ここで自身の詩に対して彼が用いる比喩は、興味深いものである。「ああ、病弱で、短命で、流産された／ただの遺骸であるこの詩の魂はエリザベスではない」（"Sickly, alas, short-liv’d, aborted bee / Those Carkas verses, whose soule is not shee." [FE:II.13-14]）肉体は墓だが、魂は天が、名声は詩が守る。しかし、「葬送詩」では名声を後世に伝えるはずの詩が、魂の抜け殻たる屍にぞらえられる。詩人はこの詩を自己言及的に「病弱で、短命で、流産された」と語るが、十五歳足らずの若さで逝き、その亡骸が埋葬されようとしているのはエリザベスであり、ここで比喩によって詩と詩の主題である少女が重ね合わされている。「流産」とは、この詩が少女の夭折によって頭詩として十分に成長しないまま、月足らずで産み落とされたことを第一義的には表しているが、

無名少女の偉人伝

この比喩は確かに、母体としての少女の身体への意識から生じているのである。

自分は葬送詩を未熟なまま流産したのだと語る詩人は、未婚のまま逝った少女を弔う際に、結婚と出産を徹底的に負のイメージで語る。世界最初の結婚であるアダムとイヴの契りは、この世に破滅をもたらした我々人類の葬儀である。

あの最初の結婚が我々の葬儀であった。
ひとりの女はそのとき、ひと打ちで人類すべてを殺したのだ。
そして今も一人ずつ、我々を一人、また一人と殺している。
我々は嬉々としてその身の消耗を
受け入れている。そして種を増やすために
惜しみもなく盲目的に自分を殺すのだ。
For that first marriage was our funerall:
One woman at one blow, then kill’d us all,
And singly, one by one, they kill us now.
We doe delightfully our selves allow
To that consumption; and profusely blinde,
We kill our selves, to propagate our kinde. (FA:Ⅱ.105-110)

この世の歴史を女の一生に見立てるならば、その〈婚姻期〉はアダムとイヴの結婚によって始まったといえ、結果的にそれによって世界は原罪を背負うことになる。イヴが禁断の果実を口にした瞬間、世界はいわば、その穢れなき処女性を喪失したのである。人類の堕罪を引き起こしたアダムの妻、イヴ。そしてイヴ以降、結婚によって日々、男を「殺す」妻たち。性交は死と表現され、子孫を残すための生殖行為は、消耗と破滅をもたらすだけの自滅的な営みであると逆説的に語られる。詩人が展開するこのようなミソジニーは、女そのものへの嫌悪というよりは、純潔を捨てた女たちに対する嫌悪として、清き少女エリザベスへの称賛と対比されている。先に触れたダンによるエリザベスへのラテン語の「墓碑銘」でも、純潔の喪失は堕罪と結びつけられている。「彼女は穢れなき肉体を造られたときのまま損なわないので／（それは蛇のいない楽園である）／神に返したいと願った。」(ideoque corpus intactum, qua factum est

—87—
integritate, /（Paradisum sine serpente,) / Deo reddere voluit,”）
原罪を背負った人類にとって、母となることもまた、凶事以外の何もではない。
赤ん坊が頭から墜落するようにこの世に産まれ落ちることは、これから
その子がこの世で苦しみと災いのなかに投げ込まれる定めにあることを、予兆
的に示しているからである。

我々は真っ逆さまに生まれる。哀れな母親が
わが子が正常で健全に産まれてこないと叫ぶのは
頭から先に生まれるという、不吉な落下によって
子が産まれないときなのだ。
We are borne ruinous: poore mothers cry,
That children come not right, nor orderly,
Except they headlong come, and fall upon
An ominous precipitation. (FA:II.95-98)

逆子にではなく、正常な出産に呪われた存在としての人類のありようをみる、
このような救いのない絶望的な調子は、墮罪以前の世界創造の一幕が「自然は
第一週目が最も忙しく／生まれたばかりの大地をおくるみで包んでいたとき」
（“When nature was most busie, the first weeke, / Swadling the new borne earth,”
[FA:II.347-348]）と、「母なる自然」（Mother Nature）が愛しいわが子を胸に抱
くイメージで語られる際には聞かれることはないのである。墮罪後の世界では、
自然という母体の生殖機能はすっかり衰えている。「今や我々が目にする春と
夏は／まるで五十過ぎの女が産んだ子のようである。」（“And now the Springs
and Sommers which we see, / Like sonnes of women after fifty bee.” [FA:II.203-
204]）父たる天が影響力を失ったのか、母たるこの世界が不毛の大地となった
のか、自然は宿し、育む力を失ってしまった。

雲は雨水を宿すことも、芳しいにわか雨を
降らせることもないので、今まさに誕生の季節というのに。
大気は母鳥のように大地を抱いて温め

— 88 —
四季を孵化させ、あらゆる生き物を誕生させることもない。
春季はかつて万物の揺りかごであったが、いまや墓である。
そして死産の胎児が大地の子宮を満たす。

The clouds conceive not raine, or doe not powre
In the due birth-time, downe the balmy showre.
Th’Ayre doth not motherly sit on the earth,
To hatch her seasons, and give all things birth.
Spring-times were common cradles, but are toombes;
And false-conceptions fill the generall wombs. (FA:II.381-386)

懐妊（“conceive”）、受精（“powre”, “balmy showre”）、繁殖（“birth-time”）、孵化（“sit”, “hatch”）、養育（“cradle”）といった生殖の比喩を次々と繰り出しながら、結局、詩人はそれらすべてを「子宮」（“wombs”）と押韻する「墓」（“toombes”）に収斂させるのである。このように、『周年追悼詞』にあっては、母は生命を産み育む存在であるというよりは死をもたらすのであって、この世に生きる我々の一生は、母によって肉体という監獄に産み落とされることで始まり、さらには人生の最期には病を生む老いという「母」によって苦しみを与えられる。

汝が生後、いかに哀れな牢獄で
乳を吸い、泣くことしかできずにいたかを想え。
そして肉体が成長しだったとき、それは哀れな仮の宿、
2 ヤードの皮膚に包まれた領土になり、
猛り狂う病か、その病の実母である老いによって
侵略されたり、脅かされたりしたことを想え。

Think in how poore a prison thou didst lie
After, enabled but to sucke, and crie.
Think, when ’twas growne to most, ’twas a poore Inne,
A Province Packe’d up in two yards of skinne,
And that usurped, or threatned with the rage
生ではなく死を育むものとしての「母」像は、いうまでもなくキリスト教的現世蔑視に基づいており、苦しみに満ちたこの世に死すべき存在として人間を産み落とす母は、衰退と死の象徴である。したがって、エリザベスの臨終の場面に至ったときには、ダンは死を母体としての世界との決別であり、そこからの解放であると捉える。「我々の肉体は子宮のようなものであり／死はちょうど産婆のように魂を故郷へ導く。」（“Our body’s as the wombe, / And as a mid-wife death directs it [the soul] home.” [FA:ll.453-454]）これこそが「第二の誕生」（“second birth” [SA:ll.450]）であり、世界のミクロコズムである彼女の肉体から産婆である死の手で取り上げられ、ヘその緒を絶つと、エリザベスの魂は永遠の生を生きるべく、まっすぐにこの世界から天界へと旅立つ。

ここで確認しておかなければならないのは、エリザベスという魂を失った世界は、単に病気衰えているだけではなく、「老衰している」（“decrepit” [FE:ll.30]）ということである。世界は、過去の思い出に浸ることしか楽しみのない「感覚の利かなくなった」（“Being tastlesse growne”）老人に譬えられる（FE:ll.51-52）。世界の最も繊細な部分は、「この体力を奪う傷と老いの矢を感じている。」（“Feele this consuming wound, and ages darts.” [FA:ll.248]）のように、エリザベスが永遠の乙女である一方で、世界は機能を失った子宮を抱えて老い生きている。女の伝記において、子宮と墓の間には〈寡婦期〉がある。エリザベスを失った世界は、「この未亡人となった大地」（“this widowed earth” [FA:ll.449]）と呼ばれ、夫に先立たれた寡婦とみなされる。夭折したエリザベスは、寡婦としてのライフ・ステージは、かわりに世界をエリザベスという主人を失った指折りのない未亡人に見立てることで、穴埋めされているのである。

『周年追悼詩』はエリザベスの死を弔う葬送詩であると同時に、死につつある世界への葬送の歌でもあり、そこには伝記的素材を欠いたエリザベスの人生を補うように、天地創造から楽園喪失、そして終末へと至る世界の伝記が織り込まれている。結婚前に夭折したエリザベスが直接、母のイメージで語られる
無名少女の偉人伝

ことはないが、詩には母体の比喩が散見される。本来、女性の伝記にあるべき〈婚姻期〉や〈寡婦期〉は「世界」に割り振られ、「世界」を女一般に見立て、罪にまみれて子を孕み、老いて夫を失い、滅していく女の二つのライフ・ステージが惨めに描かれる。後半が「破り取られた」からこそ、免れることのできたイヴの娘としての人生を、エリザベスの犠牲なき人生と対比的に繋ぎ合わせることで、ダンは不完全であったがゆえに完全たる得た少女の一生を、ひとつの聖女伝として完結させたのである。

＊本論考は、平成二十五～二十七年度科学研究費補助金（基盤 C）「近代英国における女性の〈偉人伝〉研究」（JSPS KAKENHI 課題番号 25370284 研究代表者 齊藤美和）の助成を受けた研究成果の一部である。